

## 環境の防衛から創造へ

横浜市技監

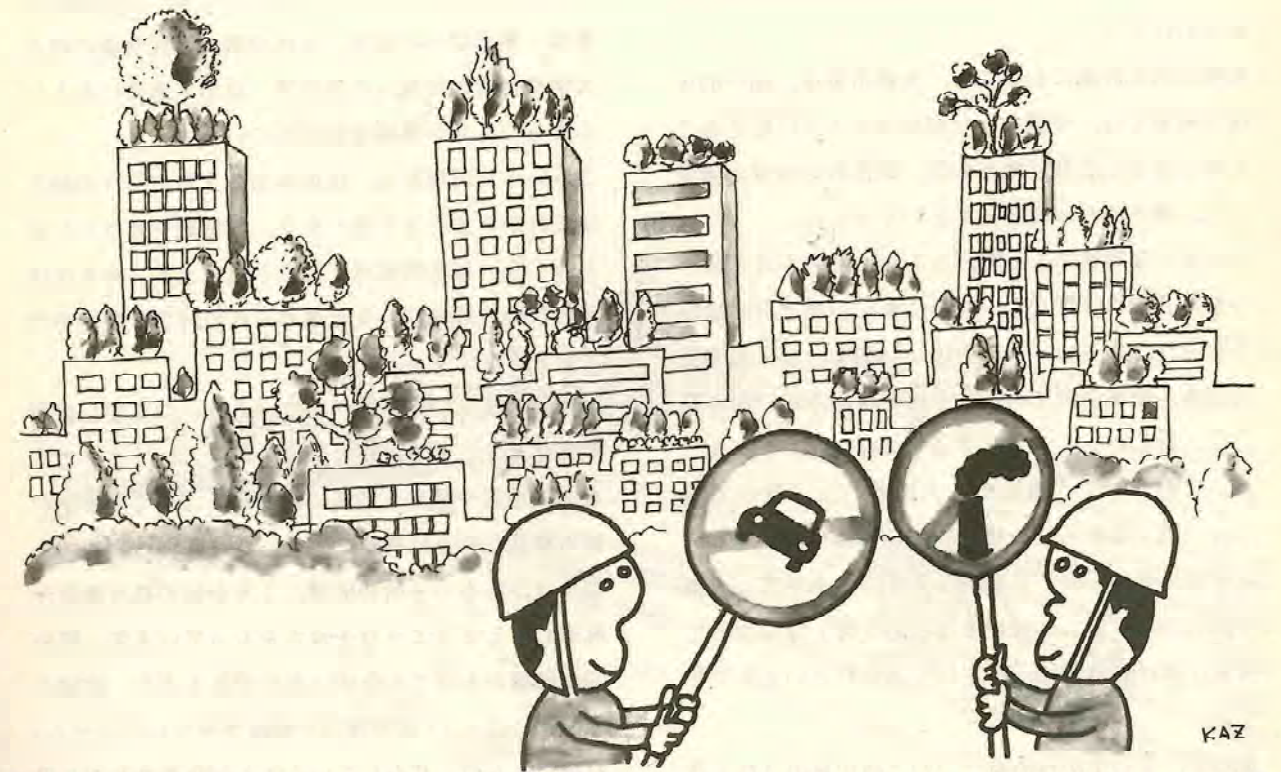
田村 明

わが国で「環境」という用語が一般化したのは極めて最近のことで、1970年を境にと言ってもよい。この年、いわゆる公害国会が開かれ、公害対策基本法改正を始め14の公害関係法が成立した。そして、翌1971年には「環境庁」が生まれることになる。一方、1972年ストックホルムで「国連人間環境会議」が開かれ、国際的な問題としても環境が議論の対象になってきた。環境という用語は、このような背景のもとに1970年代には一般の用語として定着した。いやいったん定着するとそれは爆発的ブームになった。新聞といわず書籍、雑誌といわず、「環境」という字がのらない日はないほどの大流行であった。この意味では70年代は「環境」の時代であったということができよう。しかし、問題は70年代に始まったわけではない。日本の「環境問題」はむしろ60年代の決算としてとらえられたという方が正確であろう。60年代の10年間、わが国の国民総生産は年平均10.8%、工業生産高で14.8%、エネルギー消費量で11.6%という世界に例を見ない異常な成長をとげた。これは欧米諸国の倍、あるいはそれ以上の水準での伸長であった。このような異常な成長は、急速な工業化、都市化によって達成されたものであり、この間、多くの都市問題とくに環境汚染や、環境破壊が公害問題という形で発生してきた。始めは都市活力や経済成長のシンボルのように考えられてきた煙や生産活動が、下手をすると人間の生活を蝕み、人間の生命までもおびやかすことが認識されてきた。また、目に見えないところで環境汚染が進行し、それが水

俣病はじめ4つの公害裁判に代表されるような深刻な問題をひきおこしてきたのである。この時代には、国の政策は無力であり、法規も未整備で野放しに近かった。わずかに、1964年、横浜市が電源開発株式会社との間にとりかわした公害防止協定は、全国に先がけ公害行政の不備を補う自治体の先取り行政であったし、そのほか横浜市では当時としては先進的なさまざまな公害防止政策を遂行してきた。他の自治体もこれに力を得て、独自の公害政策が実行されるようになってきたのである。このような背景の下に、国もやっと重い腰をあげて、1965年には「公害審議会」が厚生省に置かれ、1967年8月、「公害対策基本法」が成立し、1968年に「大気汚染防止法」、「騒音規制法」等が成立した。1970年の公害国会はその決算だったのである。こうして見ると、1960年代の「公害の時代」から70年代の「環境の時代」への変換を見るのだが、実質的に70年代の「環境」は、「公害」の問題であって、大気、水、緑等々の自然環境の汚染あるいは破壊をとらえる受身的な姿勢をでなかった。もともと、国連人間環境会議では、環境問題に、戦争や貧困の問題まで含まれており、公害問題だけしか考えていなかったわが国に、あらためて「環境問題」をもう少し広く考えるチャンスになった。さらに1976年のヴァンクーバーで行なわれた「国連人間居住会議(ハビタット)」では、広く人間居住全体の環境を考えざるをえないことが明らかになった。そして、わが国でも、町並み保存とか、アメニティとか、生活環境の質についての考え方が登場してくることになる。

そこで80年代の「環境問題」を展望してみたい。80年代は、まだ問題の解決していない公害面の解決や、先取りの防止は当然として、より広く環境問題を認識し、これを具体的な政策の基本的な前提としておくことが可能かどうかの別れ目の時代である。すでに一方において環境問題の後退や、公害は終わったという声をきく。しかし、巨大エネルギーを用い、巨大な活動を今後とも行なってゆく人類にとって、その活動のあるかぎり環境問題は終わることはない。環境的自覚は、われわれ人類のもつ巨大な力に対する重要な自制力であり、政策や計画の基礎条件として常に考えていなくてはならないだろう。80年代はその認識が定着するかどうかの大切な時代である。第二に、環境は人類活動がある以上、固定的ではあ

りえないという点が認識され、環境の相互的関連について、より深い科学的分析が行なわれてゆくべきであろう。「公害」、「環境」を感情の問題から、理性の問題へ移行させてゆく時代である。そして環境間のトレードオフについても正確な情報をうるべきである。この意味では80年代はより科学的「環境」の時代であらねばならない。第三には、環境は、良くも悪くも人間が長年にわたって変更し、作りあげてきたものである。それは受動的な防止だけではなく、もっと能動的に、どうしたらよりよい人間環境が創造できるかの方法を発見し、その実行をすべきであろう。70年代の「公害の環境」時代から、80年代は「環境創造」への足がかりをつかむべき時代ではないだろうか。



KAZ